

令和7年度 教員養成フラッグシップ大学フォローアップ実地調査報告書（案）

教員養成フラッグシップ大学推進委員会

大学名	東京学芸大学	調査日	令和7年11月10日（月）
調査委員	白水 始 委員、高橋 純 委員、北神 正行 委員、山口 宏樹 委員（主査代理）、 若江 眞紀 委員（大学担当）		

大学関係者（責任者）からの説明

（自律型カリキュラムデザインの概要説明）

- ・本カリキュラムは、「学士課程」「教職課程」及び「自律型カリキュラムデザイン」の3つの要素から構成されている。減じた科目を先導的な科目で補完したほか、課程全体を見直す（スリム化する）ことで、学生が自主的及び主体的に科目を選択できるようにした。
- ・自分を理解して目標を設定し成長の姿をえがく、その目標に向かって学びを自分でデザインする。振り返りながら見直して、また新たな自己像を探求していくというサイクルを回すデザインである。
- ・大学のカリキュラムと個人の体験と学内の学びを融合させていくことで、大学のカリキュラムにとじない自分の成長の姿をえがくことで、大学卒業後も学び続ける教師につながっていくと考えている。

授業見学・教職員からの報告及び意見交換

（授業見学『チーム学校と多職種協働』 4年次の必修科目・オンライン）

子どもの貧困、複雑化・多様化する学校課題、特に不登校、貧困虐待に関する内容、講義構成の後半では、コミュニティスクールを取り上げて地域住民が参加する意義等について実施する。

冒頭に簡単に講義し、関連動画を視聴後にグループワーク・ディスカッションを実施する形式。簡単なガイドブックも作成しダウンロード可能。毎授業後にリアクションペーパーを取得。Youtube をとおして当日欠席した学生も期間限定で視聴が可能。

（自律型カリキュラムデザイン実施報告）

学生において現在身につけている能力や知識に関する自己診断の分析結果。Educator's Core Values (ECV) はキャリアについて考え、将来を選択する上で核となるものを意味する。1年次から2年次にかけて、学生は知識・理解・問題解決力等を伸ばし、特に教育現場や社会課題への理解の関する項目において有意差が認められ、理解が深化したと考えられる一方で、情意的・対人的側面は概ね安定していることが把握できた。引き続き効果検証等行う。

（『教育のためのデータサイエンス』 2年次の必修科目・ハイブリット）

学校現場におけるデータの活用方法やデータサイエンスの基礎を学ぶ科目。データリテラシーの向上及び統計の活用体験を与えることに重点を置く。また、意欲の向上や学習の進化を図るため、AI によるフィードバックを採用。授業への満足度は高い。

『社会に開かれた探求と創造の学びのデザイン』 3年次の必修科目・オンライン)

教科横断的な学習やSTEAM教育等、教科・領域の枠組みを総合的に活用し、探求するプロセスを通じて学びを深める科目。オンラインで実施することで授業の展開方法や受講生の立場としても学ぶ。1グループ最大4人として、多様な専攻の学生で構成し、会話を重視した実践的な授業を展開する。複数の教員で担当しているが、コンセプトから議論してきたメンバーであるため、共通認識のもと実施できている。対面での実施も好ましいが、今後他大学への展開を見据えて、オンラインに特化している。

学生との意見交換 (○：委員、■①②③：学生)

○自律型カリキュラムデザインについて、教育創成科目の履修状況と当該科目をどういった基準で選択したのか。

■①今の自分に足りないものや不得意なものを中心に選択。必修科目5つのうち履修済みが2つ、履修中が3つ。特に日本語教育や板書指導について、知識不足を補えたという印象。

②もっと知りたいといったものを中心に選択。必修科目5つのうち履修済みが3つ、履修中が2つ。特に外国籍児童について興味あり。ただ、外国籍児童に関する科目は内容が似通っている事項もあり、違う切り口の授業もあると尚よいと感じた。

③大学入学すぐに始めたアルバイトの塾講師の経験から感じたことや教師になる前に力をつけたいと思ったことを中心に選択。多様な生徒の理解につなげるため、学校経営等幅広く受講している。

○自律型カリキュラムデザインをとおして入学時と現在で変化したことはなにか。

■①入学当初は興味が広く散漫していたが、学びを経て、ICTに関する能力不足、子どもへの対応力不足を実感し、未熟な部分に焦点をあてて学んでいる。

②科目やボランティア活動をとおして、子どもたちに自然体験活動を提供できるような教員になりたいという思いや、外国籍児童だけでなく特別な支援が必要な児童等にも関心を抱くようになった。

③ぼんやりとした将来の教師像から、自分の理想となる教師像を描くことができ、将来に向けた科目選択をおこなっているほか、教育実習でも学びをより深めたい。

○ICTや教育データサイエンス等難易度はいかがか。

■①ICTをよく使う高校ではなかったため(PCルームで操作する程度)、データサイエンス関係の科目は難しく感じた。授業についていけるように授業外で自習した。

②高校時代にコロナ禍と重なり、Zoomを活用するようになった際、自分は感覚的にわかるものでも、周囲ではわからなくて困っている者がいた。児童生徒の立場にとっても同じだと感じる。学校教育のなかでもわかりやすいシステムがあるといいと感じた。

③自身でもExcel等勉強していたが、データサイエンスの授業は難しく感じた。教師になる前にはもっと使い方等把握しておく必要があると思っている。

○教育実習の際に、学んでおいてよかったこと・事前に学んでおきたかったことはあるか。

■①ハイブリット型の授業形式に苦戦したので、授業で実践する機会があったものの、子どもたちに説明することも意識したもっと踏み込んだ学びができたよかったです。

②板書指導の授業において、学年に応じた文字の大きさ（板書方法）や指導を学習していたのは役に立った。また、『学びを支えるファシリテーションの技法』の授業で、学びの環境、子どもへの返答の仕方や姿勢等学んだことを実習に生かすことができた。

②ICT活用の観点で、ICTを活用してうまくいくこととうまくいかないことを事前に学べるとよいと感じた。また、事前に外国籍児童について学ぶことで実習先の児童の事情を理解することができた。

○『自己創造のための教育体験活動』の科目履修状況、ボランティア活動の実施状況等伺いたい。

■①『教育体験活動A』を1年次に履修。サークル活動の体験教室の補助をとおして、教育創成科目の選択につながった。

②履修予定だったが断念。塾講師のほか、大学が募集するボランティア活動情報をこまめにチェックして、先述の自然体験活動、卒業生である先輩の誘いに応じて子ども食堂の放課後ボランティアに従事した。

③履修していないが、塾講師、知り合いの誘いに応じて特別支援学校の移動教室の補助に参加。

大学関係者（責任者）との意見交換（○：委員、■：大学）

○教科教育と教科専門の融合についてどう考えているか。

■教科教育と教科専門の融合は、大学として長年取り組んできたがなかなか成果が出にくい。学生自身が取り組むべき課題でもあるため、学生が主体的に応用・実現していくべきであるという考え方に転換しつつ、免許法の枠組みのなかで大学として新しい要素を取り込んでいる。

○『教職課程を制度改正する場合は、各大学が創意工夫してカリキュラムを編成し、学生の主体的な学びを促す考えを取り入れることが望ましいと考える』について、大学の裁量や創意工夫と学生の主体的な科目選択についてどれくらい大学関与の余地があるとお考えか。

■確証をもって回答できる段階ではないが、大学が定めた仕組みと国の制度で決められた仕組みがありつつ、ある程度は自分たちで考えて自分たちで取り組むという要素は必須である。

○これからの教員養成大学に必須の設備等あれば伺いたい。

■可動式の教室、コンテンツ作成にあたっての録画スタジオ等があるとよいが、やはり全学的な組織（東京学芸大学の例：先端教育人材育成推進機構）の整備は非常に効果的であるため、組織面の支援（人件費等）もあると取組をより促進できると考える。